

## 【論 説】

# T・ジェファソン： 「教会と国家間の“分離の壁”原則」再考

佐 藤 圭 一

### 目 次

- 1 “モンティチェロ”を訪れて（序を兼ねて）
- 2 厳格分離主義者のジェファソン像
- 3 Virginian 時代
- 4 選挙戦（1800 年）での争点
- 5 大統領就任後のジェファソン
- 6 “市民宗教”を意識した最初の大統領（結びに代えて）

## 1 “モンティチェロ”を訪れて（序を兼ねて）

2011 年 9 月初旬、筆者はモンティチェロ（Monticello）（＝ T・ジェファソン邸宅）を訪れた。シャーロットツビル（Charlottesville）の中心部から南東方向へ 4 マイル（約 6 km）。おそらく 200 年前にはジェファソン自身が馬車で駆けたであろう同じ道のり（Monticello Ave.）を体感するために逗留したダウンタウンのホテルから徒歩で当地へと向かった。途中、フリーウェイ（64 号線）を潜り、居酒屋兼宿屋として 200 年以上前に建てられたミッキータバーン（Michie Tavern）を右手に見ながら、いよいよ麓からモンティチェロ（イタリア語で“小さな山”を意味する）へと辿る。ホテルから 1 時間半余り、丘の上にある邸宅は深い森に囲まれていた。ジェファソン自身が設計し、生涯住み続けた邸宅には、政治家・外交官だけではなく、建築家・科学者・発明家としての思考が凝らされている。採光を考えての天窗、一方を押すと同時に片方も

開く自動ドア，曜日表示を兼ねた絡繰り仕掛けの時計，一端のペンを走らせる  
と向かい側にある別のペスが自動的に動く複写機能を有した機械，そして2つ  
の部屋からなる書斎では床から天井まで夥しい蔵書が壁のように積まれてい  
た。（1987年にユネスコ世界文化遺産登録）

更には大農園である。（ジェファソンは自らを農夫と呼ぶ）邸宅の地下室は  
ワインセラーで占められている。ジェファソンは多くのワイン職人を招き入れ  
るほどのワイン通としても知られる。モンティチェロは広大な葡萄畑に加え  
て，玉蜀黍・南瓜等々の畑が延々と続き，ジェファソンが「海の眺め」と呼ん  
だ5000エーカー（20km<sup>2</sup>）の農園の中心部に位置する。（そこではかつて150  
人余の奴隷達が仕えていた。）

ジェファソンは，政敵となるハミルトンが工業主義を説いたのに対して，農  
本主義を主張したことは周知の事実であるが，その根拠となったものはここモ  
ンティチェロにおいて彼自身が実体験によって創作した「自然の貴族制」とい  
う概念である。ジェファソンはジョン・アダムズ宛ての書簡の中で次のように  
述べている。「自然的な貴族は，自然が人間社会に与えた最も貴い贈り物であ  
り，それは人間社会における教育，社会のよせる信頼，社会を統治するために  
必要な徳性や才幹を根拠とする。人工的な貴族は富とか生まれとかを根拠とす  
るものですが，彼らは徳性や才幹をもない貴族でありうる」<sup>(1)</sup>と。そうした徳  
性と才幹を欠いた人工的な貴族による政治的覇権を阻止しなければならないと  
いうのである。他方，ジェファソンは農民について記している。「大地で働く  
人々は神の選民であって，神は彼ら農民の胸を根本的な純真な徳のための独特  
の寄託所として選んだのである。…どういう時代，どういう国民においてであ  
れ，耕作者大衆が道徳的に腐敗したという現象については，まだ実例はない。」<sup>(2)</sup>  
『ヴァージニア覚書』

ジェファソンは，ヨーロッパの製造業に従事する徳性と才幹無き最下層民は  
社会を破壊する危険分子であると断定したのだ。これとは対象的に，他方では  
それらを備えたアメリカ農民による高度の自由の享受は社会全体のためにも安  
全であり，有益である<sup>(3)</sup>。と結論する。田園的独立自由農民の共和国（＝農本

主義)こそがジェファソンが描いた理想であったのだった。

加えて、ジェファソンはそうした自由享受のための必須条件としての道徳的感覚の鍛錬を訴える。「道徳的感覚はすべての人間に様に与えられている。それはまた鍛えればそれだけ力を増し、強められる。」<sup>(4)</sup> 後述する1800年大統領選挙で厳しく対立したジョン・アダムズが人間の善性を殆ど信じない「原罪説」を奉じていたのとは異なり、ジェファソンは人間には生得的な道徳が備わっているとした上で、「その道徳的感覚は機会あるごとに常に磨き続けなければならない、その強化が自身の値打ちをも加えることになる」<sup>(5)</sup>というのである。

ところで、(不思議と)わが国ではこれまで注目されて来なかったが、ジェファソンは2度の聖書の“編纂”を行っている。1度目は1802年に現職の第3代大統領としてホワイトハウスの執務室で、2度目は1820年政界を引退して当地モンティチェロの邸宅で施されたものである。後者についてはジェファソン自身が「ナザレのイエスの生涯と道徳」(The Life and Morals of Jesus of Nazareth)と名付けている。“編纂”ではジェファソンが必要とする箇所を切り抜き、それを用意した「白紙本」に貼り付けるという作業が繰り返された。縦8インチ(約20センチメートル)横5インチ(約13センチメートル)、48枚の紙からなるスクラップブック形式の編纂本にはキリストの教えが「道徳」として鏤められていたのだ<sup>(6)</sup>。なぜそうした“編纂”を手掛けたのか。そこにはジェファソンが培った啓蒙的合理主義者(理神論者)としての哲学があったのだ。聖書の道徳的箇所が慎重に切り抜かれる一方で、例えばイエスが水上を歩く等の奇跡に関する箇所、処女懐胎、聖母被昇天、イエスが神性を帯びる(死からの復活等)場面などは切り抜かれることなくそのままに残された<sup>(7)</sup>。ジェファソンの神は聖書の神とは異なり道徳哲学の中で機能していたのだ。彼は「キリストの教えは人類が与えられた最も卓越したそして最も慈悲深い道徳の法典である」<sup>(8)</sup>というのである。彼はこうも述べている。「判断の正しさではなく、その誠直さについて責任を問われるあなたは、単に福音書のみならず、キリストの歴史書はすべて読むべきある」<sup>(9)</sup>と。理想とする共和国を実現するための前提として、道徳意識の鍛錬により善悪の判断能力に長けた田園的独立

自由農民の存在を説いたジェファソンはその道徳の礎を聖書に求めたのであった。更には、次の言葉を知る人は少ないようであるが、「私は真のクリスチャンである、いうなればイエスの教えの弟子である（a disciple of the doctrines of Jesus）」<sup>(10)</sup>とまでジェファソンは言い切ったのである。

筆者が訪問したここモンティチェロの書斎で77歳のジェファソンが2度目の新約聖書の「編纂」に没頭している姿を想像するにつけ、これまでの研究で知り得たこととは幾多の点で隔たりがあることを認識せざるを得なかった。と同時に大いなる疑問が湧いてくるのだった。

周知のように、1950年代から70年代に掛けてそして一部は今日に至るも、「法律に基づくアメリカの政教関係は厳格（絶対）分離であるべき」との考え方に転じる契機（判例史上のターニングポイント）となったのが、続く本論でも述べるように1947年の連邦最高裁エヴァスン判決並びに翌年のマッカラム判決である。その厳格分離説の論理的支柱（＝正統性）となったのが、共に大統領を務めた2名のヴァージニア州出身者ジェファソンその人と、盟友J・マディソンであった。ジェファソンを厳格分離主義者として捉えたのは法曹界ばかりではない。学界もジェファソンを世俗主義者と見立て、州並びに連邦において彼が関わったとされる関係法規や施政とその解釈については厳格分離説を展開したのだ。否、むしろその史的根拠を法曹界に提供する指導的役割を担って来たのだ。その中心人物ともいえる重鎮プフェッファ（Leo Pfeffer）は「成人してのジェファソンには自身が一意専心する宗教と政府の完璧な独立の原則についてのいかなる迷いも生じなかった」<sup>(11)</sup>と語っている。また、政教関係を研究する者にとって必読書ともいえる“JCS”（*Journal of Church and State*）編集責任者であるデイビス（Derek Davis）は「ジェファソンとマディソンは世俗的あるいは宗教的に中立な国家を創るためにアメリカ合衆国憲法を起草した」<sup>(12)</sup>と結論しているのである。

そこで本稿では、大統領職時代を含めて施政を為すジェファソンが宗教の持つ重要性を認識し、如何にしてその効果を図ってきたかを検証する。加えて、厳格（絶対）分離説の根拠として頻繁に引用され、かつ裁判所が久しく判断を

下す際の原則（要諦）として利用し続けてきた彼の「教会と国家の間にある分離の壁」に関連して、その出典となる書簡の作成事情並びに当時の政治状況について述べる。最後に、ジェファソンをして、いわゆるアメリカ市民宗教の存在を意識した最初の大統領と見なし得る事由についても少し触れてみたい。

## 2 厳格分離主義者のジェファソン像

一昨年（2010年）3月に下された連邦第9巡回裁判所の判決は、高裁レベルとしては異様ともいえるほど全米の関心を集めることになった。ほぼ全米の公立学校において法律により朗誦を義務化されている「忠誠の誓い」について<sup>(13)</sup>、挿入された文言（＝One Nation under God）を合憲とする判断が下されたのである。「同時多発テロ」の翌年の2002年には、ところも同じ第9巡回裁判所で“One Nation under God”を違憲とする全く異なった判断が示されていた。連邦最高裁による最終決着ではないにせよ、アメリカが「神の下」で国民が一つに団結することを望む人々、また神への信仰が篤く、学校教育においても再び宗教を取り上げることがを求める親達は一昨年の合憲判決に安堵したに違いない。

この2010年の連邦高裁判決（2対1）では1人の裁判官（Stephen Reinhardt）から膨大な字数の反対意見書が出された。その冒頭で次のように述べる。「国教禁止条項（＝修正第1条）を制定した建国の父祖達は用意周到な計画下に、憲法から“神”の文字を除去したのである。なぜならば、彼らは教会と国家つまり宗教界と世俗界とを分けるための強固な隔壁（strict division）を築くことを企図したからである」<sup>(14)</sup>と。

「建国の父祖達、神の除去、強固な隔壁…」例えば公的な場所での宗教的慣行や宗教的儀式を公共の施設で行うことを裁判所が違憲と判断する際に共通して用いられる言葉が並ぶ。また「建国の父祖達」と一絡げにはしているが、裁判官は自らの判断の正当性を、ジェファソンとマディソン、特に前者に求めようとする。それには訳があったのだ。周知のように、これら文言の組合せは、上記1947年の連邦最高裁エヴァスン判決を嚆矢とする。「ジェファソンが指

導的役割を果たすことによって起草され、採択された修正第1条の規定により…州政府も連邦政府も何れもが、公然とであれ、密かにであれ、如何なる宗教組織もしくは宗教団体等の管轄事項にも関与してはならない。法律により宗教の公認化を禁じる条項はジェファソンの言葉に従えば『教会と国家の間に分離の壁』を打ち立てることを意図したものであった。…その壁は高く、しかも僅かな裂目すら黙認することは許されない。」（ブラック判事）<sup>(15)</sup>いわゆる『“分離の壁”原則』（同原則で「国教禁止条項」を解釈した）の初出である。

すなわち、裁判官の多くは、（突如として）1947年以降、アメリカの政教関係についてはジェファソンの考え方に副うものでなければならぬと考え始めたのである。だからこそ、彼が表現した“壁”に従って厳格（絶対）な“分離主義”を、少なくとも建国以来のアメリカの正統なるものと認識したのであった。他にも「修正第1条の目的は…宗教活動の領域と世俗支配の間に完璧にして恒久的な分離を創り出すことにある。」（ラトリッジ判事）<sup>(16)</sup>という見解も示された。翌年の判決では次のように極論する裁判官さえ現れた。「分離は分離であり、それ以外の何物でもない。教会と国家の関係を述べたジェファソンの比喩は『分離の壁』をいっているものであり、簡単に踏み越えられる細い線をいっているのではない。われわれは国家と宗教の完全な分離が、国家と宗教に対して最善であるという信念に、正しくわが国家の存続を賭してきたという確信を再度明らかにしたい。」（フランクファーター判事）<sup>(17)</sup>。

最高裁の裁判官が厳格分離（「分離の壁」）原則の主導者としてジェファソン名を持ち出すのは過去のことばかりではない。公共施設での十戒展示を巡って争われた2005年の裁判で反対意見を述べたスチーブンス判事は次のように言い切ったのである。「ジェファソンの比喩的な教会と国家の間にある分離の“壁”の少しの欠片でも持ち出せば、（テキサス州議会前の）十戒展示は違憲と判断せざるを得ないことになる」<sup>(18)</sup>と。

そればかりではない。「目的・効果基準」「レモン・テスト」「エンドースメント・テスト」と1960年代以降に出された後継となる各様の判断基準の使用に当たっては、各裁判官が共通して分離の厳格性をジェファソンの書簡から導

き出された「壁」原則に依拠しているのであった。

一体、裁判所判断の正統性を根拠付ける“厳格（絶対）分離主義者ジェファソン”が突如として（1947年）登場したのには如何なる事情があったのだろうか。確かに、最高裁判所が「教会と国家の間に分離の壁」を最初に引用したのはエヴァスン判決ではない。後述するジェファソンがある宗教団体に宛てた同文言を含む書簡を初めて引用したのは遡ること69年前のレイノルズ判決（1878年）においてであった<sup>(19)</sup>。しかしながら、公序良俗に反する場合には（一夫多妻が宗教上の義務であるとするモルモン教義に対して）、社会公共の利益保護の立場から制約を課せられると判示したこの判決では「教会と国家の間に分離の壁」ではなく、その直前の一節「政府の立法権は行為のみに及び、個人の見解までは及ばない」に引用する主目的があったのだ。つまりは、法は宗教的信条に介入できないが、宗教的行為には一定の制約を課することができるとする信仰と行為の二分論の立場から、“信教の自由法”の起草者であるジェファソンの言葉によりその根拠の正当性を導き出したのであった。

“厳格（絶対）分離主義者ジェファソン”は主要次の状況下で登場した。1929年に始まる大恐慌はアメリカ社会を根底から揺さぶり、失業と貧困は国民の精神すらも蝕んだ。対抗措置として講じられたニュー・ディールにより生産基盤の復興に留まらず、精神基盤の再構築も図られた。荒廃・消耗したアメリカン・デモクラシーの“巻き返し”である。『独立宣言』や世界初となる『信教自由法』を起草し、歴代大統領の中でも屈指の名声を誇るジェファソンはかかる精神の具現者と見なされたのであった。奇しくも生誕200年（1943年）を控えて、記念堂の建立が始まると共に、ジェファソンの思想や信条に関する研究とその伝播が社会現象となっていたのだ<sup>(20)</sup>。こうした背景からも、ジェファソンの言葉となれば必然的に歴史的妥当性を帯びることになるだろう。

また、ニュー・ディール政策には人種差別撤廃等のマイノリティの自由擁護策も含まれていた。上記のブラック、ラトリッジ、フランクファーターをはじめとして「厳格分離主義」を採る裁判官が多数任命された事情もこのことに関係していよう。いわゆる「ルーズベルト・コート」を構成した連邦最高裁裁判

官9名は（1947年時点で）全て民主党大統領が任命したものである。（F・ルーズベルトが7名を、後任のトルーマンが2名を任命）「終身制」と「先例拘束の原則」とが相俟って彼らの判断は長期に亘って判例史上に影響力を留めることになったのだ。裁判官の多くは宗教を私事として捉え、国があらゆる宗教から絶縁し、全ての宗教に対して中立であることを求める。そして、宗教の自由は個人の関わりを極力抑制することにより達成されると考える。その効果はルーズベルト政権下で早くも現れる。ユダヤ教徒やカトリック信者を中心に宗教的マイノティの殆どが支持政党を民主党に変更しているのだ<sup>(21)</sup>。

更には、「国教禁止条項」に初めて“分離の壁”原則を導入したブラック判事自身の思想的背景である。判事が自らの生涯を記した自伝では、幼年期から少年期への思い出として所属したバプティスト教会（Primitive Baptist Church）における日曜学校及び教会が主催する課外活動の思い出に紙幅が占められている。その体験が、後にブラック自身が語った「宗教的信仰は教会、社会あるいは政治の拘束を受けない全く私的な領域とすべきである」<sup>(22)</sup>という考え方に帰着したものと考えられる。

後述するが、ジェファソンの「教会と国家の間にある分離の壁」とは彼が大統領に就任した翌年の1802年1月1日付けでコネティカット州ダンベリーの「バプティスト連合」宛ての書簡の中に入れられていた一句である。植民地時代から新興のバプティスト教会は新生児洗礼を否定し、自らの信仰に基づいた礼拝を独自で行うことを主張し続けていた。そのため特にコネティカット州を含むニューイングランドでは当局から厳しい監視と取締りを受けていた。従って信教の自由と政教分離は譲ることのできない課題であった。ジェファソンの書簡は大統領選挙において、そうした立場に置かれた同連合からの支持を受けたことの返礼として出されたものであった。後述するように、そこには大いなる政治的意味も含まれていたのだ。しかしながら、同じバプティスト教会宛ての書簡、また「全能の神は人の心を自由なものとして創り給うた」（『ヴァージニア信教自由法』）というジェファソンに対して、ブラック判事が特別の親近感を覚えたことについては想像に難くない。加えて「壁」といういわば不動の城



壁を連想させる文言からも、「分離の壁」原則は建国の父祖ジェファソンの哲学に副うものとして、厳格分離主義の象徴となったのである。

ところが、当時「教会と国家の間にある分離の壁」は今日イメージされる程には単純ではなかった、ジェファソンは厳格分離主義者でもなかった。彼自身は2度と使うことのなかった比喻を、裁判所は単なる象徴してではなく、むしろ rule of law として扱ったのだ<sup>(23)</sup>。更には、宗教の影響力を公共の場から排除しようとする世俗主義者にとっても壁という比喻は希望を叶えるシンボルの存在となったのだ<sup>(24)</sup>。だが、歴史が示すところに従えば、ジェファソンは必要とあれば簡単に「壁」を跨ぎ、しかも自由に往来していた。今日の感覚で古い時代の事象を解釈するという傾向は何も連邦最高裁判事に限ったことではないのである。

### 3 Virginian 時代

独立を宣言したアメリカは2つの課題に直面していた。1つは各種各様の歴史を持つ邦が一致団結して独立戦争を遂行しイギリスに勝利しなければならなかったことであり、次に、『独立宣言』で共和制国家の樹立を宣言したことに対応して、各州においても新しい民主的政府を早急に組織しなければならなかったことである。そのため、ほとんどの州で、信仰の自由を巡る問題が表面化した。つまり植民地時代に税金で運営された公認（法定）教会と強制的に税金を徴収された他宗派の信徒の間で争いが起きる。その中でも議論が最も白熱化し、明確な結論が示されたのがヴァージニア州であった。ジェファソンはその中心に位置していた。

王領植民地としてのヴァージニアでは久しくイギリス国教会が支配的地位を保っていた。そのため、教会や聖職者、儀式を否定するクエーカー教徒に対する弾圧は特に厳しく、集会すること、また彼らを接待すること、教義の書物を扱うことについても厳しい罰則が科せられた。更には、ヴァージニア植民地議会は法律によって、親達が子供の受洗を拒否することを刑法上の犯罪とした

ため、それを教義として認めないバプティストも処罰の対象とされていたのである。しかしながらジェファソンが『ヴァージニア覚書』の中で筆したように、ヴァージニアの広大な土地ゆえの移民の増加で国教会以外の信者が急増する。施行された法律の多くは効力を残しつつも、国教徒側にも漸次寛容の空気が醸成されていた<sup>(25)</sup>。

こうした中で、ジェファソンは『ヴァージニア信教自由法（Bill for Establishing Religious Freedom）』を起草したのである。それはヴァージニア州下院議員となった翌年の1777年（『独立宣言』宣布の同じく翌年）のことである。「何人に対しても、宗教的礼拜に参列し、宗教的特定場所を訪れた教職者に経済的支援を与えることを強制してはならない。何人に対しても、その宗教上の思想見解または信仰ゆえをもって、強制、制限、妨害を加え、または、身体もしくは財産に関して負担を課し、その他一切の困苦を与えてはならない。すべての人は、宗教についての各自の思想見解を表明し、これを弁護、支持する自由を有する。」<sup>(26)</sup>ちなみに、この『信教自由法』は当時としてはその内容が過度に進歩的であることから、実際に州議会に（ほぼ原案通りに）承認されるのは7年後の1786年、つまりはジェファソンが駐仏中のことであった。宗教上の課税を禁止し、宗教選択の自由をもすべての人に保証する同法は正しく「ヴァージニアにおける宗教的自由の実現のための戦いで用いられた偉大な道具」<sup>(27)</sup>といった表現に相応しい画期的なものであったといえる。前述のプフェッファーも「人類の自由を飾る偉大な文書」<sup>(28)</sup>との評価を与えている。

しかしながら、「一個の人間に対し、その信ぜざる思想見解の宣布のために金銭の供出を強制することは罪深きことであり、暴政である。」<sup>(29)</sup>という一句にもあるように、この『信教自由法』は個人が所属する教会との関係を理由として、国家からの損害を受けることのないように、つまり国家から個人を守ることを目的としたものである。国家と教会との関係を定義するものではなかった。否、この時代ジェファソンが筆した膨大な文書・書簡・発言等からは「政教（＝教会と国家の）“分離”（separation of church and state）」という文言を確認できない。もちろん「教会と国家の間にある“壁”」という表現が使用され

ることもなかった。「すべての人間の魂の配慮は彼自身にのみ属する事柄であり、神自らは、その人間の意思に反して救済されようとはなされない。」<sup>(30)</sup>「何人も、他人をして自己の信仰を定めしめるいかなる権力をも有しない。信じることの無い信仰は信仰とはなりえない」<sup>(31)</sup>「教会とは人々の自発的な集まりであり、人々が神の意に叶い、また彼らの魂の救済に役立つと判断する方法で神を公的に礼拝するために、自発的に結びついたものである」<sup>(32)</sup>。

ジェファソンは公認“教会”の設立を禁じているが、“宗教の公認化”を否定していない。それには理由があったのだ。ジェファソンが州下院議員として『信教自由法』を起草した2年後の1779年にヴァージニア州知事であるジェファソンは「断食と感謝の日を指定する法案 (bill for “Appointing days of Public Fasting and Thanksgiving)”」の起草に参与している。この1779年というのは独立戦争が転換期を迎えた年でもあった。前年の米仏同盟成立により、戦略の再考を余儀なくされた英国は、主戦場を王党派勢力が強い南部に変更したのである。1779年上半期にはジョージアやサウスカロライナにおける戦いでアメリカ軍は相次いで敗退する<sup>(33)</sup>。英国軍の攻勢は刻々とヴァージニアに近づきつつあった。「断食と感謝の日を指定する法案」は危機迫るそうした状況下で起草されたものである。聖書に基づく（マタイ4.2）「断食」の法制化は、直前の戦いに備えて、神からの試練を一体となって受容すると同時に、知事として州民の連帯感や団結心の更なる強化を訴えたものといえる。ジェファソンは13植民地の不協和の現状を打開するため、またそれゆえに流布した劣勢との噂を払拭するために、『独立宣言』の最後を次の文言で結んでいる。「この宣言の支持のために、われらは聖なる摂理の保護を信頼しつつ、相ともに、われらの生命財産および貴き名誉を（神に）捧げることを誓う。」<sup>(34)</sup>。

そればかりではない。ジェファソンは『宗教についての覚書 (Notes on Religion)』の中でこう述べている。「国家の法律が認める限りにおいて個人の宗教活動を禁じることはできないが、国を侵害する活動は許されない。法律に依拠した活動こそが真の寛容の範囲を意味するものである。」<sup>(35)</sup> ジェファソンとマディソンを擁し、彼らの活躍もあって修正第1条の制定時、ヴァージニア州

がロードアイランド、ニューヨーク両州と並んで当時としては完全な宗教の自由を認めていたことからすれば想像が難しいかもしれないが、ヴァージニアでも「宗教の自由」が「社会秩序や法の遵守」と両立できるか否かが最大の問題点となっていたのだ。『ヴァージニア覚書』の中でジェファソンは公認教会制度の廃止は新しい、しかも疑問も多い“実験”であると見なす。その上で、姉妹州のペンシルヴァニアとニューヨークの2州が繁栄しているのは、「すべての宗派が平和と秩序の維持に貢献してこと」を挙げている。そして、彼はヴァージニア州では公認教会制度の廃止が平和と社会秩序の阻害要因とならないよう、“実験”の公正なる遂行を州民に訴えるのである<sup>(36)</sup>。共同体に対して敵対関係に立つような「宗教の自由」を認めた訳では決してないのである。

それはジェファソンだけに限ったことでもない。ジェファソンが『独立宣言』で引用したとされる『ヴァージニア権利章典 (Declaration of Rights)』（「独立宣言」発布の1ヶ月前の6月12日採択）はジョージ・メイソンによって起草されるが、第16条（宗教条項）のメイソン原案では（宗教の自由な活動の享受について）「社会の平和、幸福、安寧を妨害しない限り」<sup>(37)</sup>という文言が入れられていた。対案となったマディソン修正案では「国家の存在が明白に危険に晒された場合を除き」<sup>(38)</sup>となっていた。最終的には「全ての人は良心の命じるに従い、宗教の自由な活動のための平等な権利を有する。そして各自がキリスト教徒としての自制、愛そして慈善を行うことは互いの義務である。」<sup>(39)</sup>との文言が採択されるが、「宗教の自由」と「社会秩序」との両立は、民主政府の樹立を急ぐ当時の指導者達が解決を図らねばならない共通の課題であった。

だからこそ、ジェファソンは前述のように徳性と才幹を備えた自然の貴族制、すなわち道徳的鍛錬が施された人材育成の必要性を訴えたのである。そのためにも宗教的信条の共有が図られなければならなかったのだ。そのことは教育にも反映されていた。「宗教書による読誦、宗教の授業あるいは学校内での礼拝の実施に当たっては、特定宗派や特定教義と一致させることがあってはならない」<sup>(40)</sup>ジェファソンが起草した『初等学校設立法 (bill for the Establishing of Elementary Schools)』を議会が承認したのは1796年のことであった。

前述したように、連邦最高裁が突如として厳格分離主義に転じたのはエヴァソン判決と翌年1948年のマッカラム判決であった。後者では、諸宗派が派遣する教師によって公立学校内で行われる宗教の授業を、同じジェファソンの言葉を引用して違憲としている。何とも皮肉である。

#### 4 選挙戦（1800年）での争点

ところで、ジェファソンの“政教分離観”を調査するための今回の渡米では、偶然にも“Did Thomas Jefferson Believe in God? (ジェファソンは神を信じていたか?)”という副題が付された歴史ジャーナルをワシントンDC市内の書店で入手した。*(American History)*<sup>(41)</sup> 6ページ(A4版)からなる特集を組んだ同誌ではジェファソンを「正統なクリスチャンでも、世俗主義者でもない」と結論している。ジェファソンの“壁”についての誤解ばかりではない。彼の“宗教観”を巡っては学術的にも未だに論争が絶えないのだ。

それが社会問題にもなった“事件”が1800年に起こった。(ジェファソン自身が「1800年革命」と呼んだ) この1800年には、共に『独立宣言』書に署名し、そのちょうど50年後の記念日当日(1826年7月4日)に相次いで死去するという因縁浅からぬアダムズとジェファソンの2人の陣営が大統領職を巡って激しい選挙戦を繰り広げていた。というよりもアメリカ全土は騒擾の状況を呈していた。

その大きな原因となったのが、前述したように、当時としては特異(進歩的)なジェファソンの宗教観であった。彼が熱意をもって信仰と良心の自由の必要を訴える(例えば『信教自由法』)まではよかった。しかしながら、駐米フランス公使館員の要請に応じて知事時代に筆した『ヴァージニア覚書』が問題とされた。その内容の過激性ゆえにジェファソン自身さえも出版を躊躇っていたものが、パリで評判となり、最初は同地で私的(著者匿名)な仏語版、続くロンドンで英語版が出版される(1787年)に至って著者名が公表されてしまったのである<sup>(42)</sup>。『ヴァージニア覚書』の「17番目の質問」には次の箇所があった。

「政府の合法的な権限なるものは、人が他人を害するような行為に対してのみ行使されるべきものである。自分の隣りの人が『神』の数が20あるといたり、いや神がいないのだといたりしても、自分には何も害を加えるものではない。隣の人がそんなことをいっても、それは自分の財布をすられることでもないし、自分の足を折られることでもないのだ。」<sup>(43)</sup> また「もしかりに、1つの宗教が正しい宗教であるとしても、また、われわれの宗教がその1つの宗教であるとしても、999の他宗教が、アプローチはおのおの違っていても、真理への方角に向かって近づいてゆくことが私は望ましく思われる。」<sup>(44)</sup>

前述したようにジェファソンは無神論者でも、まして宗教に敵対する思想家でもない。実像は全く異なる。ところが、アメリカでの公刊を考えないという気安さからか、あるいは大使として赴任したフランスでは啓蒙主義者や勢いづく進歩派から多くの助言を求められたことも原因してか、一部は過激な言葉で綴られていた。フランスは宗教勢力を打倒した革命前夜を迎えていた。これがvirginian ジェファソンであったならば、さしたる問題とはならなかった。しかしながら、共和国政府の長たる大統領の資格を問う選挙となると状況は一転した。前述したように、この当時、一部の州（3州）を除き、殆どの州で公認教会制度か、あるいはキリスト教の優位を州憲法で規定していたからである。

政敵達は過敏に反応する。書棚から埃を被った『覚書』を見つけ出して色めき立った。全国区に進出したジェファソンに対する絶好の攻撃材料が見つかったのである。フェデラリスト党の主力を構成する長老派教会や聖公会等から次々と批判の声があがった。とりわけ、公認教会制を堅持しているニューイングランドを根城とする会衆派教会員達は罵詈雑言の限りをジェファソンに浴びせたのだった。「ジェファソンの目論みは宗教と礼拝を愚弄する政府の創設にある」「（仮にジェファソンが当選すれば）敬虔な魂は滅び、悪徳が蔓延し、社会の紐帯はばらばらになる」…<sup>(45)</sup>。

イエール大学の学長（会衆派教会の牧師）ドウエイト（Timothy Dwight）の発言も辛辣を極める。ヴォルテールやダランベール、ルソーといった啓蒙的合理主義者と交わり、フランス社交界でも活躍したことを逆手に取って次のよう

に危機を煽ったのだ。「ジェファソン率いるリパブリカン党と無神論者たちの同盟が勝利することになれば、彼らはわれわれをジャコバン体制に引き込むに違いない。それが現実となれば、彼方此方で聖書の焚書が目撃され、子供達からは神を嘲ける言葉が聞かれる。信仰心が喪失し、魂は消滅するのだ。」<sup>(46)</sup>その効果はてき面に表れた。ジェファソンの大統領当選が決まった直後、フェデラリスト党の支持者たちは新政権による聖書の押収や焼却を恐れて、それらを庭に埋めたり、井戸に隠したりしたという<sup>(47)</sup>。オランダ改革派のリン牧師も続いた。「ジェファソンを当選させることは、進んで社会の絆の断絶と、宗教の破壊と不道徳がこの世に蔓延りことを、われわれが認めることになる。不信心は確実に放蕩行為を誘発し、社会秩序と幸福の全ての破壊をもたらす。理論者を大統領職に就かせようとする声は、正しく神への謀反と思われるに違いない」<sup>(48)</sup>新聞でもネガティブ・キャンペーンが展開された。フェデラリスト系新聞「ガゼット(Gazette)」紙は1800年の次のような誘導記事を掲載した。「全てのアメリカ国民に問いたい。われわれは神そして宗教的大統領(ジョン・アダムズ)に引き続き忠誠を誓うべきか?それとも(=神の存在を否定する)不敬なるジェファソンへの支持を表明すべきか?」<sup>(49)</sup>。

前述のように、ジェファソンは「宗教的自由」と「社会秩序と法の遵守」のバランスの確保に腐心していた。それを実現するための道徳的人間の育成を聖書の教えに求め、またヴァージニアの危機にあっては「断食」を更には「安息日破りへの罰則」<sup>(50)</sup>をも“強要”したことからすれば、これらの事実を全く無視しての罵詈の数々はジェファソンを落選させることだけの目的のために企まれたものである。

ジェファソンを支持するリパブリカン達は、拱手傍観を決め込んでいたのではない。例えば「共和制と宗教的自由の発展のため、政治と宗教の適切な関係の継続に熱心に取り組むジェファソンは寛大で中庸を備えた思慮のある指導者である。」また「ジェファソンは生活の維持のために税金を徴収されることに反対するクエーカー、メソジスト、バプティストの主張を支持しているだけのために、根拠なき攻撃を受けている。」<sup>(51)</sup>といった反論を行っている。しかし

ながらジェファソンの考えは根拠なき無責任な非難であっても静観すべきとの考えだったのだ。大統領就任後に送付した私信の中でこう述べている。「“全ての偽り”に反駁を行うことは不可能である。嘘偽りを言う人々には彼らの良心の呵責に期待したい。彼らを非難しないとしても、いつの日にかは、それを知る人達によって判断が下されることになるだろう」<sup>(52)</sup>。

他方、被害を受け続けてきた新興の教会（マイノリティグループ）は違っていた。ジェファソンへの批難渦巻く中で、多くの教会が彼を支持する側に回った。結果的にはそのことが勝利につながることになる。その1つにジェファソンの「教会と国家の間にある分離の壁」が挿入された書簡（1802年1月1日付け）を送ったコネティカット州ダンバーリーのパプティスト連合があったのだ。そこで少し、そのコネティカット州のパプティストについて触れてみたい。前述したように、教義上の特異性からパプティストと既存の主要教会との間では争いが絶えなかった。同州（邦）は1698年、全てのタウンは税金によって牧師の生活を維持すべきとの法律を制定した。更には1708年の法令では「同邦内の全ての教会は公認教会である会衆派の教義内容・礼拝方式で統一される」ことが定められていた。これによって、会衆派以外の宗派はもとより異教徒さえも会衆派信徒と同様に会衆派教会の維持のための課税負担を負ったのである。1784年に法律が改正された。公認教会（会衆派）以外の教会所属者へは証明書の提出を義務として課税を免除されたが、その証明書には会衆派教会の幹部複数の承認が必要だったのだ。加えて、会衆派教会の維持のための課税はプロテスタント教会所属以外の人々には継続されていた。法律によって宗教活動が著しく制限され、かつ税金で支えられた公認教会制度に表面から反旗を翻したのが、パプティスト教会だったのだ<sup>(53)</sup>。

1790年に設立されたダンバーリーの「パプティスト連合（the Danbury Baptist Association）」は26の教会からなる連合体である。教会員数が急増していったとはいえ、当時コネティカット州内のパプティスト教会は圧倒的マイノリティであったことは疑いもない。そのパプティスト連合自体も教会員は1484名を数えるに過ぎない<sup>(54)</sup>。他方、アダムズの再選を支持する「会衆派・フェデラ



リスト党枢軸連合体」は、この地では宗教的にも政治的にも他を圧倒していた。その意味からも、他州のこととはいえ、公認教会制の存続を否定した『信教自由法』の起草や、無神論者の如くのような『覚書』を執筆したジェファソンの登場は、会衆派を含めた体制側にとっては上記の過剰な反応にも示されていたように、それは悪夢だったに違いない。一方、バプティスト等のマイノティ反体制側にとっては、ジェファソンの大統領選に勝利することは正しくフランス革命の再現（＝僧侶による抑圧からの解放）に匹敵するほどの意味を持っていたと思われる。ジェファソン大統領就任式の当日、マサチューセッツ州チェシャー（Cheshire）にあるバプティスト教会が発した次の声明がそのことを象徴している。「宇宙を支配する万能の神は、偉大なる使命を成就させるために一人の男を遣わした。その名はジェファソン。彼は残存する貴族制のすべてを放擲するために、そして共和主義を守護するために遣わされて来たのである」と<sup>(55)</sup>。

この1800年の大統領選挙は僅差でジェファソンが勝利した。（選挙人はリパブリカン党から73人、フェデラリスト党から65人選ばれた）しかも“泥試合”は選挙キャンペーンが終わり、いざ最終段階になっても続いた。（得票が同数の2人のリパブリカンに対して正・副大統領決めるための投票が下院で実施された。ハミルトンを除くフェデラリストは当然のことながらジェファソンではなくアーロン・バーを支持し、混乱を増長させた<sup>(56)</sup>。）

アダムズの再選が阻止されたばかりではない。以降フェデラリスト党はこの1800年と境として、急速に衰退して行く。フェデラリスト党が活躍できた時代は既に幕を閉じていたのだ。確かにフェデラリスト党には権力を集約して多様な13邦を一つにまとめて、歩み始めた不完全な国家を連邦国家へと導いた功績がある。しかしながら、独立戦争を勝利した寡頭制を政治基盤とする強権的政治手法は「合衆国連邦憲法」（1787年）と、いわゆる「権利章典（修正第1～10条）」（1791年）の制定をもって終焉の時を迎えていた。戦争終了と共に多くのアメリカ国民は本来の共和制への移行を求めたのだ。「権利章典」の10箇条は連邦政府を制限するために制定されたのであって、決して州政府を制限

するために制定されたものではないのである。黄昏時期を迎えるのは公認教会制度の維持を主張する国教会や会衆派教会も同様である。急激な移民の増加や西部地域への急速な発展は、既存教会の制度的枠組みを瓦解させた。因習的形式に代わってアメリカに敬虔主義的、福音主義的性格を持つ宗派が躍進する環境がもたらされる。アメリカの宗教は急激にその姿を変化させていた。だからこそ、「教会とは人々の自発的な集まりであり、人々が神の意に叶い、また彼らの魂の救済に役立つと判断する方法で神を公的に礼拝するために、自発的に結びついたものである」<sup>(57)</sup>と主張するジェファソンや他の啓蒙的合理主義者との共闘がアメリカでは可能となったのだ。かつて神権政治を説くジョン・コトンと激しく論争したロジャー・ウィリアムズがロードアイランドで果たした夢を、2度目の大覚醒を経て、全米規模で再び実現することになった。世俗の権力とは癒着しない同じ目的を持つ個人からなる自発的共同体（＝デノミネーション）としてのバプティストやメソジスト等、すなわち公認教会制に反対してジェファソンを支持した教会が全米に勢力を伸張させていったのはこうしたアメリカ固有の状況による。

では一体、ジェファソンは“国家レベルでの政教関係”をどのように考えたのだろうか。1801年3月に第3代大統領に就任して以来、保守派が国家的危機として煽っていたように神への不敬を貫いたのであろうか。あるいは厳格分離主義者が主張するように、「教会と国家の間にある分離の壁」原則に則して「（その壁は）高く、僅かな裂目すら黙認することも許さなかった」のだろうか。

## 5 大統領就任後のジェファソン

事実は全く異なっていた。ジェファソンは政治の場からの宗教の締め出しを望んだのではない。否、むしろ衝突しがちが諸要素を抱える新生の共和国にあって、ジェファソンは公共の場における宗教の重要な役割、つまり統合としての社会的機能を併せ持つ宗教の特徴を積極的に活用したのだ。加えて、彼は宗教の“政治的機能”も大いに利用する。選挙戦によって深く傷つ

いた議会議員との関係修復や鋭く対峙した教会との融和を宗教を通して図ったのであった。

「分離の“壁”」書簡を送った同じ日の1802年1月1日、ジェファソンはファンファーレ鳴り響く中で“巨大なチーズケーキ”をホワイトハウスで受け取った。直径は4フィート（約120cm）を超え、周囲13フィート（390cm）、高さ17インチ（約43cm）、重さ1,235ポンド（約560kg）から成る巨大チーズケーキにはジェファソンが好んで使用した座右銘“暴政への反抗は神への忠誠の証し”が記されていた。また添えられた手紙には「大統領閣下…言葉だけではなく、行動と誠意で大統領への愛を証明するため、閣下にこのチーズケーキを捧げたい」<sup>(58)</sup>という文言が記されていた。製造したのは前出のマサチューセッツ州西部チェシャー農村のバプティスト達である。受渡しに立ち会ったバプティスト教会の牧師ジョン・リーランド（John Leland）指導の下で、1800年大統領選挙では信仰の自由の実現を願って全員一致でジェファソンに票を投じた。マサチューセッツ州ではコネティカット同様に会衆派とフェデラリスト党の支配下にあり、チェシャーのバプティストは宗教的にもそして政治的にも“合法的”な差別を受けるマイノリティであった。ジェファソンは1805年まで（つまり3年間に亘って）バプティストが製造したこのチーズケーキをホワイトハウスでのレセプションやパーティーで使用したという<sup>(59)</sup>。

そのリーランドをジェファソンは巨大チーズケーキを受け取ってから（同じく書簡送付の）2日後の1月3日に連邦下院での日曜礼拝の説教者として招聘したのである。ジェファソンは大統領任期中8年間この日曜礼拝を継続している<sup>(60)</sup>。

一連のこうしたジェファソンの行動からは大要次の2点が推測できる。1つは会衆派・フェデラリスト党の支配下にあるニューイングランドの地にあって、バプティストが一貫してジェファソンを支持したことへの感謝の念あるいは返礼の表明である。ダンバリーのバプティスト連合への書簡にある「教会と国家の間にある分離の壁」とはバプティストが置かれた状況に同情したジェファソンがフェデラリスト党と連合した会衆派“教会”へ向けての抗議の意味

が込められていたと思われる。ちなみに、同州における公認教会制の廃止は1818年。つまり書簡送付後も16年間公認教会制は維持されたことになる。加えて、在仏中のジェファソン自身がマディソンに向けてその制定を促した「権利章典」により宗教については州の専管事項となることが明確になった。しかも書簡は「権利章典」制定から既に10年以上の歳月が経過していたのである。制定に執着していたジェファソンがそれを認識していないはずはない。だからこそ、彼は“私信”として、自分を支持した特定の教会に向けて、バプティストの「信仰の自由」を確保するために、それを阻害してきたコネティカット州の会衆派“教会”（church）と“州”政府（state）が採るべき適切な関係（separation）を示したものと考えられる。繰り返しになるが、ジェファソンは当該書簡以外で“壁”という文言を使用することはなかったのだ。こうしたことから“壁”とそれを内包した書簡（私信）にはジェファソンの怨念ともいえる個人的感情とそれに加えて政治的思惑が絡み合っていたと思われる。

2つ目は選挙戦で攻撃対象とされた自身の宗教心、すなわちジェファソンを陥れるために押された無神論者・背教者という烙印を払拭する狙いがあったと思われる。そのことを批判する（見透かした）議員もいた。リーランドの日曜礼拝の説教を聞いたフェデラリスト党の1人の下院議員は「議会の説教師として紹介されたリーランドというおそまつで、無知で教養のないチーズ屋の説教を聴かされた。だが、その説教には今までにないほどの多くの人々が聴衆として動員されていた。またこれまでのあらゆる儀式に反して大統領は1人の聴衆として参加していたのである。こうしたパフォーマンスは過去に行われたとは聞いたことはないし、これからは二度と繰り返されることのないよう希望したい。」<sup>(61)</sup> こうした宗教との積極的関与は一般国民に安堵感を与えることを期待すると共に、捏造した敵対者への明確なメッセージとなることを企図したと思われる。

だが、それだけではない。ジェファソン大統領は、バプティスト、プレスビテリアンに留まらず会衆派や聖公会など対立した教会にも、宗派を問わず、要請があれば財務相や国防省等の政府建物の使用を許可していた。「ジェファソ

ン大統領の治世期間、首都ワシントンDCの日曜日は町全体が教会と化した」<sup>(62)</sup>とまでいわれている。

更には専属チャプレン制である。大陸会議で創設された連邦議会専属牧師制を、ワシントン、アダムズに続いてジェファソンも承認する。加えて、彼は新たに軍隊専属牧師制を創設する。1806年4月10日にジェファソン大統領が署名した同法では旅団毎の専属牧師の配属を骨子とすると共に、全兵士に対しては次のように命じた。「すべての将校並びに下士官には奉事式での参禱を奨励する。いかなる奉事式であれ、仮に俗悪あるいは不敬な行為があればその者は軍法会議に召喚され、議長により厳罰に処せられる。」<sup>(63)</sup>

しかしながら、こうしたジェファソン大統領治世における政治と宗教の密なる関係を指摘することに対しては、次のような疑問が呈されよう。前任のワシントン、アダムズが行った「断食と感謝の日の指定」を、なぜジェファソンは拒んだのかと。それには次の2つの理由が考えられる。1つはアメリカ合衆国の行政の長が、宗教的国家行事を“主催者”として兼務することへの忌避である。というのもジェファソンには確固とした信念があったからである。彼は修正第1条の制定理由を次のように語っている。「憲法が禁じているものは宗教的団体・教義・規則・行事に対する合衆国政府の干渉（intermeddling）だと考える。この結論は、連邦議会は国教を定めることに関する法律あるいは自由な宗教活動を禁止する法律を制定してはならない（修正第1条）だけからではなく、同じく合衆国に委任されない州の権限の留保（修正第10条）からも導き出される。従って、連邦政府には宗教行事（religious exercise）を命じるいかなる権限も委任されていない。」<sup>(64)</sup>

2つ目の理由は以下の通りである。既述したように英国軍の軍靴の足音が近づくヴァージニア州にあって、ジェファソンは知事として「断食と感謝の日を指定する法案」の起草に関与している。その目的は英国軍に対抗するための連帯感や団結心を宗教を利用することによって強化することにあった。ジェファソン大統領治世の2期8年間はルイジアナ購入とその後の領土拡張に伴うインディアン部族との衝突は頻発するが、外国との直接的戦争は回避されていた。

前者との戦いに圧倒的に勝利したとすれば、国民統合を目的として敢えて宗教を持ち出す必要はなかったと考えられる。それを裏付けるように、ジェファソンと同様に厳格分離主義の理論的支柱として言動が度々引用される第4代大統領マディソンは、英国と再度戦火を交えた1812年戦争で4回に亘って全国民に向けて「祈禱と断食の宣言（Public Day of Prayer and Fasting）」を発したものであった<sup>(65)</sup>。

ところで、筆者の“ジェファソンを求めて”の今回の旅行ではモンティチェロと併せてヴァージニア大学も訪問した。モンティチェロから北西へ5マイル（約8km）離れた場所に位置する同大学は、ジェファソンが1826年の死を迎えるまで、情熱を注ぎ込んだヴァージニア州の教育制度の整備と発展の一環として、建物の設計を含めて彼自身の理念に基づいて創られたものである。モンティチェロからも眺望できたロタンダ（The Rotunda）はヴァージニア大学のシンボルであり、左右二列の回廊を結び、ゆるやかな段々となった中庭の頂上に位置するローマ神殿風の円形ドームを天井に持つ。完成した大学をジェファソンは“The Academical Village”（学術の村）と名付けた。「知性は大学に集う様々な人々による討究により育まれる。教員と学生の交流こそが知識探求を活性化に繋がる。」と謳われているように、建学当時から変わることなく今日まで、教授と学生は寝食を共にして学問探求と絆を深めているという<sup>(66)</sup>。宗教についてもジェファソンは工夫を凝らしている。ジェファソンは大学に宗派の多元化が図られることを目的として神学担当の教授の任用には消極的姿勢を貫いた。もちろん、それは宗教教育の排除を目的としたものではない。特定宗派が影響力を持つこと嫌ったからだ。ジェファソンは1822年の政府当局へ提出したレポートに次のように記した。「人間と創造主の間に存在する関係、またその関係から帰結する神に対する義務は全人類にとって最も重大な関心事であり、それを教育研究に課すことは責務でもある。」<sup>(67)</sup>

ロタンダ内の1室はジェファソンの指示に従って礼拝用に当てられた<sup>(68)</sup>。ちなみに、訪れたヴァージニア大学の広大なキャンパス内、ロタンダから北東方向に100mほどには“The Chapel, UVA”という礼拝堂が建立されている。赤レ

ンガのゴシック調の礼拝堂はステンドグラスが美しく、宗教・宗派と問わず全ての訪問者に開放されていた。

こうした事実からは、1人反対に回った連邦最高裁判事の意見が思い出される。ジェファソンの“壁”原則に則り、エヴァスン判決と共に、厳格（絶対）分離主義論が高揚する契機となった前出の連邦最高裁マッカラム判決（公立学校での宗教教育を違憲）でリード判事は次のように語っていた。「教会と国家の間に分離の壁を語ったとされているジェファソンは学校から宗教教育を排除しようとした訳ではない。彼の教会と国家の分離に関する一般的な意見と、彼が教育で行った実際の決定との差異を無視することはできない。」<sup>(69)</sup>

繰り返しになるが、「道徳的人格の形成には宗教が不可欠である」として宗教教育の必要性を訴えたのはジェファソン自身であったのだ。

## 6 “市民宗教”を意識した最初の大統領（結びに代えて）

“One Nation under God” “God bless America” “so help me God”…。「9・11 同時多発テロ」直後のアメリカを持ち出すまでもなく、アメリカには建国以来、国難や危機に際して国民を団結・統合するための宗教的文言や儀式、宗教的シンボルや象徴が存在する。リンカーン大統領は南北戦争最中に「神の摂理」「天罰」「人間としての罪償い」等の宗教的文言を引用しながら贖罪を述べると共に疲弊した国家の復活を訴えた（第2回就任演説）。F・ルーズベルトは次のように訴えて大恐慌に立ち向かった。「へりくだって神の祝福を願う。神よ、われわれ1人ひとりを、そして1人残らず守りたまえ！ 神よ、来たるべき日において、私を導きたまえ！」（第1回就任演説）アイゼンハワー大統領が「忠誠の誓い」に“under God”を挿入したのは、ソ連の水爆実験成功などにより米ソ冷戦の緊張が最高度に達した1954年のことである。

多民族多宗教化が急進するアメリカにあっては国家を統合すること、すなわち、アメリカの国璽である“*E Pluribus Unum*”（多くのものから一つのものになる）のための機能を有する“宗教的装置”の役割は21世紀に至るも変わる

ことなく重要度を保ち続けている。筆者は、そのことを「9・11 同時多発テロ」著後のアメリカで目撃した。国民の一人ひとりが発する“God”が、やがて渦となって巨大なユニゾンと化して行った。国民が団結して戦後最大級の国難と対峙してしたのである。（“united we stand”）<sup>(70)</sup>

ちなみに、“*E Pluribus Unum*” が採択されたのは連邦規約の下で衆愚政治化した文字通り「危機の時代」最中の 1782 年のことであった。

トーマス・ジェファソンこそ、その統合装置としての役割を担う宗教の機能（＝市民宗教）を最初に意識した大統領であったといえる。既述したように、前 2 代の大統領とは異なり「断食と感謝の日の指定」を行わなかったことを理由としてジェファソンは宗教界と政治界とを峻別していたと断じる見解がある。しかしながら、逆にジェファソン大統領が初出し、以降の大統領が継承した宗教的修辞がある。それが「神に選ばれし国民」、つまり聖書に登場する古代イスラエルの物語をアメリカにおいて再現することであった。ワシントンの死去後（1799 年）最初の大統領選挙では、党派的政治による分裂を危惧したワシントンの予感が的中してしまった。国論が厳しく分裂する新生共和国にあっては、勝利へと導いた国家的英雄（象徴）に代わる、新たな“導き”を必要としたのだ。

第 2 回就任演説でジェファソンはいう。「私は神の恩寵をも必要とするであろう。われわれは彼の手の中にある。彼はかつてのイスラエルと同様、われわれの祖父を故郷の地から導き、生活のすべての必要と安楽に満ちている国に彼らを住まわせた。」ヨーロッパは暗黒のエジプトであり、アメリカは約束の地である。神は、すべてのアメリカ国民に対する光明とすべく新しい社会秩序を樹立するよう彼の民を導いたとするこの文言は、1630 年のアーベラ号上でのジョン・ウィンスロップ総督の「丘の上の町」演説に始まり、旧約聖書「出エジプト」を淵源とするこのテーマは市民宗教の継続的テーマである<sup>(71)</sup>。それをジェファソンは大統領として初めて取り上げた。

このことから判断できるように、ジェファソンの「教会と国家の間にある“壁”」をもって、アメリカ合衆国憲法修正第 1 条は厳格（絶対）分離を規定し



ているとする解釈は、実際のジェファソンの会話や行動とは全く対立しているのである。

但し、特定宗教・宗派に偏しないことが多宗教化した今日のアメリカにおける市民宗教の要諦であるように、ジェファソンは決してイエス・キリストについては触れない。確かにキリスト教に由来するものの、キリスト教そのものではない。特定するならば統合装置として宗教の機能が失われるからである。すなわち他宗教・他宗派の「信教の自由」に対する侵害となるのだ。彼はそのことに最も心を砕いていた。それは前述したジェファソン“編”「ナザレのイエスの生涯と道徳」でも明らかである。それは奇跡やドグマを排除し、道徳や秩序、権利に関連させていた。ジェファソンによる形式や語調がそれ以降の市民宗教を形造ったといえるのである。

## 注

- (1) 松本重治（責任編集）『世界の名著 33』中央公論社 1976年 301頁。
- (2) Peter Smith, *Notes on the State of Virginia—Thomas Jefferson*, Gloucester, 1967, p. 156. 松本重治『同上』262頁。
- (3) 『同上』301頁。
- (4) Karl Lehmann, *Thomas Jefferson American Humanist*, University Press of Virginia, 1985, pp. 102–105.
- (5) *Ibid.*
- (6) *American history*, Oct. 2011, p. 28.
- (7) (foreword by) William Murchison, (introduction by) Judd W. Patton, *Jefferson's "Bible"—the Life and Morals of Jesus of Nazareth*, American Book Distributors, 2005.
- (8) Peter Smith, *Ibid.*, p. 156.
- (9) 松本重治『同上』281頁。
- (10) *American history*, *Ibid.*, p. 29.
- (11) Leo Pfeffer, *Church, State and Freedom*, Beacon Press, 1953, p. 94.
- (12) Derek H. Davis, *Religious Pluralism and the Quest for Unity an American Life* (*Journal of Church and State*, vol. 36 no. 2, p.251).
- (13) US. Flag Code—Under God Pro Con, org.

- (14) NEWDOW v. Rio Linda USD, United States Court of Appeals for the Ninth Circuit (2010), at 3934.
- (15) Everson v. Board of Education of Ewing Township, 330 U. S. 1 (1947) at 18.
- (16) McCollum v. Board of Education, 333 U. S. 203 (1948) at 231.
- (17) 330 U. S. 1, at 31-32.
- (18) Van Orden v. Perry, 545 U. S. 677 (2005) at 708.
- (19) Reynolds v. United States, 98 U. S. 145 (1879) at 162.
- (20) Richard Hofstadter, The American Political Tradition & the Man Who Made It, Vintage Books, 1974, p. 22.
- (21) Robert Booth Fowler and Allen D. Hertzke, Religion and Politics in American—Faith, Culture and Strategic Choices—, Westview Press, 1995, p. 91.
- (22) Hugo L. Black, Jr. and Elizabeth Black, Mr. Justice Black and Mrs. Black, The Memories of Hugo L. Black, Jr. and Elizabeth Black, Random House, 1986, p. 8.
- (23) Gary Scott Smith, Faith & the Presidency, Oxford University Press, 2006, p. 78.
- (24) *Ibid.*
- (25) Peter Smith, *Ibid.*, pp. 150-151. 松本重治『同上』254頁。
- (26) 松本重治『同上』271頁。
- (27) 330 U. S. 1 at 39.
- (28) Leo Pfeffer, *Ibid.*, p. 111.
- (29) 松本重治『同上』269頁。
- (30) Thomas Jefferson, Notes on Locke and Shaftesbury, cited in Julian P. Boyd ed., The Papers of Thomas Jefferson (vol. 1, 1760-1776), Princeton University Press, 1969, p. 546.
- (31) *Ibid.*, p. 545.
- (32) *Ibid.*
- (33) Alan Brinkley, American History, vol. 1, McGraw-Hill, 2003, pp. 137-139.
- (34) 松本重治『同上』266頁。
- (35) Sidney E. Mead, The Lively Experiment, Harper & Row, 1976, p. 196.
- (36) Peter Smith, *Ibid.*, p. 154. 松本重治『同上』257頁。
- (37) Daniel L. Dreisbach, Real Threat and Mere Shadow, Crossway Books, 1987, pp. 137-138.
- (38) *Ibid.*
- (39) *Ibid.*

- (40) Cleon W. Skousen, *The Making of America*, The National Center for Constitutional Studies, 1985, p. 676.
- (41) *American history*, *Ibid.*, pp. 26-31.
- (42) Peter Smith, *Ibid.*, p. vii-ix.
- (43) *Ibid.*, p. 152. 松本重治『同上』255頁
- (44) *Ibid.*, p. 154. 『同上』257頁
- (45) Daniel L. Dreisbach,; Mr. Jefferson, a Mammoth Cheese, and the “Wall of Separation between Church and State”: a Bicentennial Commemoration (*Journal of Church and State*, vol. 43. no. 4) p. 736, 2001.
- (46) Gary Scott Smith, Faith & the Presidency, *Ibid.*, p. 71.
- (47) Daniel L. Dreisbach, Thomas Jefferson and the Wall of Separation between Church and State, New York Univ. Press, 2002, p. 18.
- (48) Gaston Espinosa, Religion and the American Presidency, Columbia University Press, 2009, p. 93.
- (49) Merrill D. Peterson, Thomas Jefferson & the new nation, Oxford University Press, 1975, p. 638.
- (50) Daniel L. Dreisbach, Real Threat and Mere Shadow, pp. 167-168.
- (51) Peter Smith, *Ibid.*, pp.71-72.
- (52) *Ibid.*
- (53) Daniel L. Dreisbach, Thomas Jefferson and the Wall of Separation between Church and State, pp. 26-42.
- (54) Daniel L. Dreisbach; Mr. Jefferson, a Mammoth Cheese, and the “Wall of Separation between Church and State”, p. 737.
- (55) *Ibid.*, p. 728.
- (56) Merrill D. Peterson, *Ibid.*, pp. 625-642.
- (57) Thomas Jefferson, Notes on Locke and Shaftesbury, *Ibid.*, p. 545.
- (58) Daniel L. Dreisbach; Mr. Jefferson, a Mammoth Cheese, and the “Wall of Separation between Church and State”, p. 728.
- (59) *Ibid.*, pp. 743-744.
- (60) Mark J. Rozell and Gleaves Whitney, Religion and the American Presidency, Palgrave Macmillan, 2007, p. 47.
- (61) Daniel L. Dreisbach; Mr. Jefferson, a Mammoth Cheese, and the “Wall of Separation between Church and State”, p. 742.

T・ジェファソン：「教会と国家間の“分離の壁”原則」再考（佐藤）

- (62) Mark J. Rozell and Gleaves Whitney, *Ibid.*, p.47.
- (63) Daniel L. Dreisbach, Real Threat and Mere Shadow, p. 120.
- (64) Daniel L. Dreisbach; Mr.Jefferson, a Mammoth Cheese, and the “Wall of Separation between Church and State”, p.740.
- (65) Robert L. Cord, Separation of Church and State, Baker Book House, 1988, p. 24-25.
- (66) The Rotunda Visitor’s Guide to Thomas Jefferson’s Rotunda at UVA.
- (67) Daniel L. Dreisbach, Real Threat and Mere Shadow, pp. 131-132.
- (68) *Ibid.*, p. 132.
- (69) 333 U. S. 203 at. 247.
- (70) 佐藤圭一著『米国政教関係の諸相』（改訂版）成文堂 2007 年 1-4 頁。
- (71) R・N・ベラー 河合秀和訳『社会変革と宗教倫理』未来社 1985 年 354 頁。